

# 高校に広まる定期考査廃止の動き

## — そのメリットと課題を考える —

近年、全国の高校で、定期考査（中間考査や期末考査）の廃止の動きが広がっている。2018年度に東京都千代田区立こうじまち麴町中学校が定期考査を廃止し、代わりに各教科・科目で単元ごとに実施する単元テストを導入して以降、定期考査の廃止の動きは徐々に全国の中学校や高校に広がりつつある。その1つが鹿児島県の公立高校だ。鹿児島県立与論高校が21年度から定期考査を廃止したのを皮切りに（[同校の取り組みは、『VIEWnext』高校版2023年12月号「指導変革の軌跡」に掲載](#)）、その動きは鹿児島県内の他校にも広がり、23年度の時点でいじゅういん伊集院高校、きんこうわん錦江湾高校などが定期考査を廃止した。今後、その数はさらに増える見通しだ。

### 定期考査が抱える問題を単元テストで解決する

そもそも、定期考査の実施に法的な規定はない。定期考査をいつ、何回実施するかは、それぞれの学校の判断に任されており、定期考査を実施せずに学習評価を行うことも可能だ。しかしこれまでは、定期考査は欠かすことができない評価方法として高校で実施されてきた。そして、各教科・科目の学習状況を5段階で評価する「評定」において、定期考査の成績は大きなウエートを占めてきた。

だが、22年度から実施された新学習指導要領が、定期考査を軸とした学習評価のあり方に一石を投じることになった。これまで多くの高校が、定期考査などのペーパーテストで「知識・技能」を測り、その結果を中心にして評定を算出してきた。一方、新学習指導要領では、「知識・技能」以外の観点でも評価する観点別学習状況の評価の実施がこれまで以上に求められており、定期考査中心の学習評価のあり方に改善の余地があることを示した。特に、学習評価は集団内の相対的な位置づけを評価するためのものではなく、一人ひとりの生徒にどのような資質・能力が身についているかを見取り、それを踏まえて生徒がその後の学習の取り組み方を改善したり、教師が指導方法を改善したりするためのものとする考えが広まることで、定期考査が抱える様々な問題が浮かび上がってきた（[図1](#)）。

図1

#### 定期考査の課題

考査と考査の間の空きが長く、  
生徒のつまづきを見つけにくい



一夜漬けの対策で乗り切る  
生徒が少なくない



定期考査中は  
様々な学校活動がストップする



定期考査の実施回数は、各学期に1、2回程度であり、考査と考査の間には2か月ほどの空きが生まれる。定期考査が生徒の学習上のつまづきを発見する機会として十分かという点、そうとは言い切れない。また、定期考査の出題範囲は、いずれの教科・科目においても広範囲となるが、生徒の中には部活動が停止になる考査前の1週間程度だけ勉強し、いわゆる「一夜漬け」で考査を乗り切ろうとする者も少なくない。そして、そうした短期集中の学習によって定期考査で一定の成績を取っても、学習した内容を考査後に忘れてしまう生徒も多いと聞く。それは学習内容の定着だけでなく、学習習慣の確立という面でも課題と言える。

さらに、定期考査期間中は、部活動だけでなく、生徒の校外活動も停滞する。「総合的な探究の時間」などで企業や大学、自治体などと連携した活動に取り組む生徒は増えているが、そうした活動も、定期考査期間中は停止を余儀なくされることが少なくない。

以上のような様々な問題を解決する1つの方法が、定期考査を廃止し、各教科・科目で単元ごとに実施する単元テストの導入だ（図2）。



単元テストを実施することで、生徒は定期考査よりも高い頻度で学習内容の理解度を確認することができ、その後の学習の取り組み方を改善しやすくなる。また、単元テストの範囲は狭いため、テストの準備の負担も少ない。教師は短いスパンで生徒の理解度を把握できるため、生徒のつまづきを発見しやすく、その後の授業の内容や指導方法をスムーズに改善することができる。

そして、定期考査を廃止すると、部活動や学校行事が停止する期間が短くなるため、年間を通じて部活動や学校行事に取り組みやすくなり、大学や企業等の学校外の機関と連携した教育活動も停滞させずに済む。

## 単元テストによって学びが途切れにくくなる

定期考査を廃止すると、学校はどう変わるのだろうか。

鹿児島県立伊集院高校は、23年度から全学年で定期考査を廃止し、各教科・科目で単元ごとに実施する単元テストで学習評価を行うことにした。同校では、各単元で育成を目指す資質・能力と、それを育成するための授業計画、そして評価方法を明記した単元シラバス（図3）を生徒に配布し、授業を行っている。生徒は単元

シラバスを見て、「この単位ではどのような資質・能力を身につけるのか」「どのような内容の単元テストが行われるのか」をあらかじめ理解した上で授業に臨む。

約2か月に1回の定期考査がなくなり、単元テストが行われるようになって、生徒の学びの様子はどのように変わったのだろうか。同校の東健一先生は「生徒は今までよりも計画的に学習に取り組むようになった」と説明する。

「生徒は単元テストを意識して日々の学習に取り組んでおり、授業後に質問に来る生徒も増えました。教科・科目によって1つの単元が終わるタイミングは異なりますが、どの学年の生徒も、毎週3教科・科目前後の単元テストを受けていますから、定期考査後のような、学習から気持ちが離れてしまう時期はなくなったと思います」（東先生）

教科・科目や単元の内容によって、単元テストで授業1コマを使う場合もあれば、20分程度で単元テストが終わる場合もある。単元テストの内容も、「知識・技能」を中心に評価するものもあれば、「思考・判断・表現」を評価するパフォーマンス課題を実施する場合もあるなど、様々だ。

「単元テストはクラスごとに実施日が異なるため、先にテストが終わったクラスから問題が漏れてしまい、公平性が担保できないのではないかといった不安もありました。年度当初、生徒に、『単元テストは自分で学習内容の理解度を把握し、その後の学習に役立てるためのものなので、先にテストが終わったクラスの人から問題を教えてもらってよい点数を取っても意味はないよ』と説明しました。そうした単元テストの意義を生徒は理解してくれたようで、生徒間で問題を教え合うようなことはこれまで全く見られていません」（東先生）

## 図3 鹿児島県立伊集院高校の単元シラバス

第2学年 単元シラバス		令和5年度 鹿児島県立伊集院高等学校		
		No.		5
		実施時期 (2)月 第(3)週～(3)月 第(4)週		
単元名・題材名		教科・領域	科目	単位数
第3編波 第1章波の性質		理科	物理	2
この単元で育成する資質・能力〈評価規準〉				
知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度		
波の干渉について理解し、強め合う条件や弱め合う条件を説明することができる。光・音などの波動現象を波動の一般的性質として統一的に理解できる。ドップラー効果について法則性を理解できる。干渉についての条件を確認することができる。夕焼けや青空の色の違いが、光の散乱によることを理解できる。また、レンズと球面鏡の特徴を理解できる。ヤングの実験などの現象から、光が波の性質をもつことを理解できる。	波を表す量的関係およびグラフを用いた理解ができる。干渉や回折、反射、屈折などの現象が、ホイヘンスの原理によって説明できることを理解し説明できる。ドップラー効果について思考し表現することができる。レンズと球面鏡の特徴を光の進み方から思考し表現することができる。ヤングの実験など、光が波の性質をもつことによる現象であることを理解し表現できる。	波の現象に関心を持ち、探究しようとする態度が見られる。音や光などの現象が波動という同じ物理的な性質を持つことに興味を持ち、一体化して捉えようという態度を身につけている。ドップラー効果が日常生活で観測できる身近な現象であることに興味・関心を持ち、意欲的に探究する態度が見られる。光の屈折・反射の例として、日常生活にも関連するレンズや球面鏡に関心を持ち、探究する態度が見られる。		
学習・授業計画				
時数	学習活動・評価法	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
1	正弦波の式① 発問評価 授業態度	・位相のずれや進行方向の違いなども考慮して、正弦波の式を正しく表すことができる。	・正弦波の式に $x=0$ 、 $t=2T$ を代入した式について、それぞれが何を表す式かを説明することができる。	・正弦波を数式で表す方法について理解しようとしている。
2	正弦波の式② 発問評価 授業態度			
3	波の伝わり方① 発問評価 授業態度	・水面波の干渉で強めあう点と弱めあう点の条件を理解している。	・2つの波源から出た波が、強めあう条件と弱めあう条件を説明することができる。	・波の干渉や反射、屈折、回折などの波の伝わり方に興味をもち、理解しようとしている。
4	波の伝わり方② 発問評価 授業態度	・波の反射・屈折の際に、どのような法則があるかを理解している。	・海岸に向かってくる波の波面が海岸線に対して平行になる理由を説明することができる。	
5	波の伝わり方③ 発問評価 授業態度			
7	単元テスト ペーパーテスト	・単元で取り扱った基本事項について理解している。	・単元で取り扱った基本事項について、科学的に考察したり、表現しようとしている。	
使用教材	<ul style="list-style-type: none"> <li>改訂版物理基礎（数研）</li> <li>物理基礎研究ノート（博洋社）</li> <li>セミナー物理基礎＋物理</li> </ul>			
補足	<ul style="list-style-type: none"> <li>●下記(1)～(5)の項目を、評価の観点別(知識・技能、思考・判断・表現、主体的に学習に取り組む態度)に評価します。成績はそれらの評価から総合的に判断します。</li> <li>(1)授業への取り組み【知識・技能、主体的に学習に取り組む態度】 授業に対する姿勢、学習態度、科学への興味・関心等で判断する。</li> <li>(2)授業プリントの取組状況内容【主体的に学習に取り組む態度】 授業内容を適切にまとめているか、日常生活の中の科学と関連付けて考えてきているか等を評価する。</li> <li>(3)観察・実験等【知識・技能、主体的に学習に取り組む態度】 観察・実験に対する姿勢、予測や考察、器具の操作、報告書(ワークシート)等から評価する。</li> <li>(4)教科書・問題集の問い【知識・技能、思考・判断・表現、主体的に学習に取り組む態度】 各問題への取り組みとその内容から評価する。</li> <li>(5)単元テスト・実力考査【知識・技能、思考・判断・表現】 学習内容に合わせて問題を出題する。 教科書の「チェック」および単元の「まとめと演習」を学習することで、単元テストに対応できる。</li> </ul>			

\*学校資料をそのまま掲載

## 単元テストのあり方を工夫する学校も

各教科・科目で単元ごとに実施する単元テストとは別に、全教科・科目が足並みをそろえて同じ期間に単元テストを実施するようにしたのが、鹿児島県立錦江湾高校だ。同校では、23年度から1・2年生の定期考査を廃止し、単元テストに替えた（3年生は従来通り定期考査を実施）。1・2年生は、各教科・科目の授業内で実施する「単元テストC」以外に、3年生の定期考査期間に合わせて午前中に実施する「単元テストA」と、自学自習の時間として終礼後に設定されている「夕活」の一部の時間を利用して実施する「単元テストB」（2か月に1回程度、3日間実施）の3つのタイプの単元テストに取り組む。同校の原田正和先生は、3つの単元テストは性格が異なると説明する。

「単元テストCは、各教科・科目の授業内で主に『思考・判断・表現』や『主体的に学習に取り組む態度』を

評価することを主眼に適宜実施します。一方、単元テストA・Bは、『知識・技能』を中心に評価するもので、学年一斉に実施します。ただし、各教科・科目の進度に合わせて単元テストA・Bを自由に実施できるようにしており、単元テストA・Bの期間だから必ず単元テストを実施しなければいけないわけではありません。単元テストA・Bの実施は各教科・科目の判断に委ねています」(原田先生)

毎週、いずれかの教科・科目で単元テストが行われるようになったことで、従来の定期考査前のような一夜漬けの学習から、休み時間などのいわゆる隙間時間をうまく利用した学習に変わった生徒が増えたと原田先生は感じている。また、単元テストCを充実させるために、パフォーマンステストや論述問題など、多面的な評価方法について教師間で学び合う雰囲気がこれまで以上に醸成されているという。

## 単元テストをよりよく機能させるための工夫も必要に

単元テストを実施することで、学習内容の理解・定着を丁寧に見取り、生徒のつまづきを早期に発見することが期待できる。その一方で、定期考査の廃止に対する不安の声も聞こえてくる(図4)。

単元テストを導入した高校では、単元テストの作成や採点を教師が負担に感じることも少なくないようだ。今後、単元テストにおいて外部の教材やテストを利用したり、ICTによる自動採点を導入したりすることが、教師の負担の軽減だけでなく、生徒の学びの履歴の蓄積という意味でも重要になってくるだろう。

単元テストは学習内容の理解度を測ることを目的としていることもあって、従来の定期考査とは異なり、校内順位を出さないケースがほとんどだ。実際、伊集院高校も錦江湾高校も単元テストでは順位づけを行っていない。しかし、定期考査の廃止によって校内順位を知る機会が減ったことで、保護者から「子どもの今の学力と志望大学の合格に必要な学力とのギャップがどの程度あるのかが分かりにくい」「学校は進学指導に力を入れないということなのか」といった声上がることもあるようだ。また、「定期考査を廃止すると、勉強に没頭する機会が減り、学力が低下するのではないか」といった声も聞かれるという。

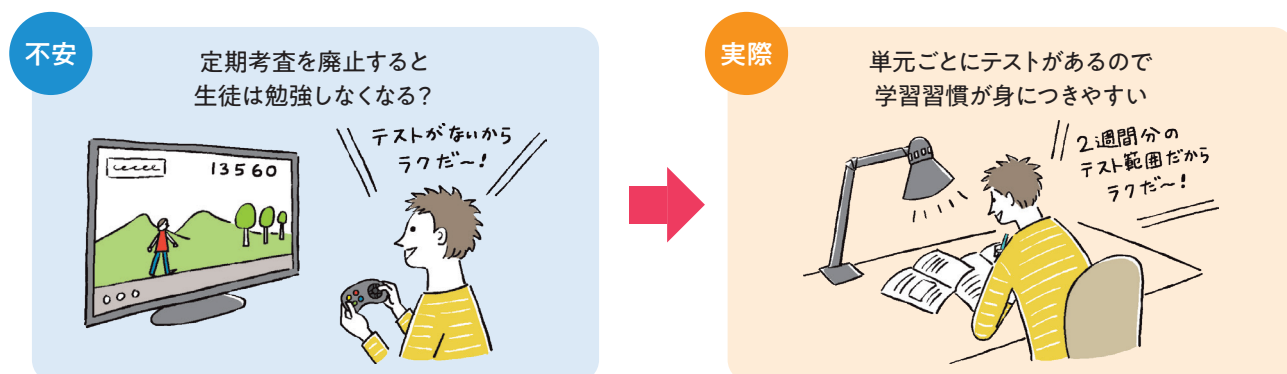
「自身が高校時代、定期考査を受けるのがあたり前だった保護者の不安を払拭するために、単元テストによって生徒の学力をより詳細に把握していること、そして定期考査の廃止によってむしろ授業進度が速くなり、受験勉強への切り替えがスムーズになることなどを丁寧に説明しています。その上で、24年度は校内実力テストを1回増やして、生徒や保護者が校内順位を知る機会を増やすことも検討しています」(伊集院高校・東先生)

錦江湾高校の進路指導部長を務める石井孝芳先生は、校内順位、そして全国レベルでの自分の位置を知りたいという生徒や保護者のニーズに、校内実力テストや模擬試験を活用して応えていきたいと考えている。

「ただテストを増やすのではなく、単元テストで自分の弱点を克服したり、学習の取り組み方を改善したりすることが、その後の模擬試験や大学入学共通テストへとつながっていくという、学習のつながりを生徒に意識させたいと思います。そうすることで、生徒はより明確な目的を持って単元テストに臨めるはずです」(石井先生)

図4

### 定期考査廃止に対する不安と実際





**不安** 定期考査で順位を出さないと受験に対する意識づけができない？

**実際** 校内実力テストや模擬試験で校内・全国の位置を確認できる

**不安** 頻繁に単元テストを行うことで教師が多忙化する？

**実際** 多忙化しているケースもある。外部の教材やテストの活用が負担軽減の鍵に

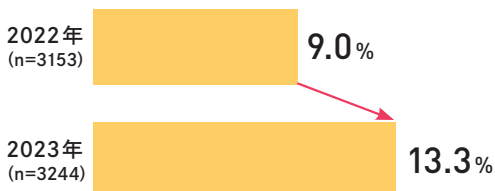
## 教師と生徒双方の負担の軽減がポイントに

定期考査を廃止している高校は現時点ではまだ数は少ないが、今後、定期考査を廃止したり、実施回数を減らしたりしながら、単元テストを拡充し、生徒の学習状況をより丁寧に見取ろうとする学校は増えていくものと考えられる(図5)。だが、単元テストが増えることで教師の負担が増してしまえば、学校現場の大きな課題である教師の働き方改革を停滞させてしまう。また、生徒にとっても、単元テストの回数が増えることで、学習の負担が増え過ぎてしまい、学びから遠ざかってしまうようなことはあってはならない。教師と生徒双方に負担をかけずに、日々の学習の成果と課題を見取る機会をいかに充実させていくかが今、問われている。

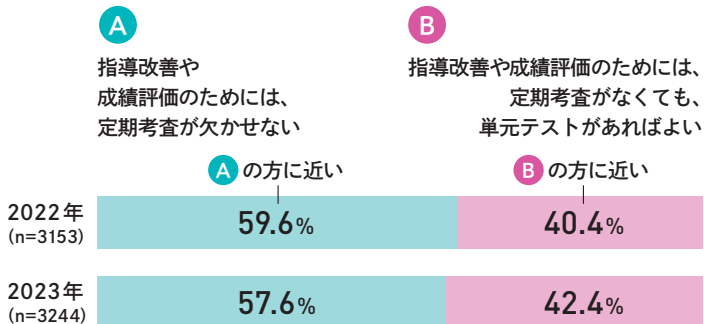
図5 高校教師の定期考査に対する考え

**Q** 貴校について、次のようなことはあてはまりますか。

◎学校全体で、定期考査の回数を減らすことを検討している



**Q** あなたは、授業や生徒指導の面で、どのようなことを大切にしていますか。



【出典】ベネッセ教育総合研究所「学習指導調査 2022」「学習指導調査 2023」

次のページに、定期考査廃止のメリット(効果)と課題をまとめた

メリット（効果）

単元テストが高い頻度で実施されることで、生徒は一夜漬けの学習スタイルから脱却し、学習習慣を身につけることができる



単元テストを実施することで、生徒は高い頻度で学習内容の理解度を確認できるため、自身の学習の取り組み方を改善しやすい



単元テストを実施することで、教師は短いスパンで生徒の理解度を把握できるため、生徒のつまづきを発見しやすく、自身の授業を改善しやすい



年間を通じて部活動や学校行事に取り組みやすくなり、探究学習などにおける大学や企業等の学校外の機関との連携を停滞させずに済む



課題

学習に没頭していた定期考査前の1週間がなくなる



単元テストの作成や採点に関する教師の負担が増える



校内順位を知る機会が減少する



解決の一手

単元テストを活用して、短期集中の学習観から生徒を転換させる

外部教材・アセスメントを活用して、教師の負担軽減を図る

校内実力テストや模擬試験を活用して、自分の位置を知る機会を確保する